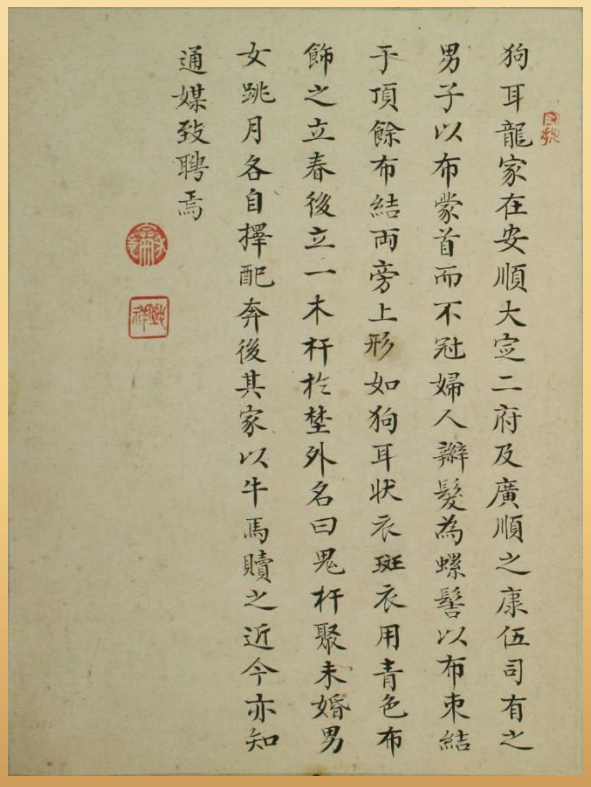
<東文研・ASNET共催セミナー>

中国西南少数民族における漢服受容のジレンマ

To Dress or Not To Dress:
Body Representations of the Ethnic Minorities
on China's Southwestern Frontiers

衣装には人間の社会的地位や社会的ルールが反映される。中国における衣装着用に関する初期の規則は、儒教の古典に由来した。それは人々の社会階級に対する理解に深く根を下ろした。例えば、中国の「衣冠制度」には、国づくりの規範や儒教を基にした社会的秩序が映し出されている。文明—野蛮という二元論によれば、中原地域の住民は教化されており、成熟した衣冠制度に従い生活を送る。一方、辺境地で生活する「野蛮人」は、「文明人」に衣装の本当の意味を知らないと思われていた。本報告では、近代中国の中央政権が、如何にして官製の衣冠制度を、西南少数民族（とりわけ、現在の貴州省）に導入し、それを帝国、又は国の統治下に置いたのかに焦点を当てて論じる。


狗耳龍家在安順大定二府及廣順之康伍司有之
男子以布蒙首而不冠婦人辮髮為螺髻以布束結
于項餘布結両旁上形如狗耳狀衣斑衣用青色布
飾之立春後立一木杆於壁外名曰鬼杆聚未婚男
女跳月各自擇配奔後其家以牛馬贖之近今亦知
通媒致聘焉

◆ 日　時：　2016年 1月 21日（木）17:00-18:00

◆ 報告者：　安琪氏（講師、上海交通大学・人文学院）

◆ コメント：　李如玲氏（JSPS海外特別研究員、東京大学）

◆ 会　場：　東京大学　本郷キャンパス内　東洋文化研究所　1F ロビー

※ 報告は日本語で行われます。

東京大学
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
Network for Education and Research on Asia